

# Survey of Internet use among elementary and junior high school students: Differences in recognition between the child and their parents

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/43089">http://hdl.handle.net/2297/43089</a>

# 小中学生のインターネット使用に関する実態調査 —親の把握状況と親子間の認識の違い—

津田 朗子, 木村留美子, 水野 真希, 喜多亜希子\*

## 要 旨

本研究は、小中学生のインターネット使用状況とそれに対する親の把握状況、親子間の使用に対する認識の違いを調査した。対象は1自治体の全小中学校に通う小学4～6年生849名、中学1～3年生896名とその保護者であり、自記式質問紙調査を実施した。

その結果、インターネット使用率は小学生70.8%、中学生84.4%で、使用時間は学年が上がるほど長くなっていった。使用機器は家族のパソコンが最も多かったが、中学生では iPod touch、自分のパソコン、自分のスマートフォンを使う者、複数の機器を用いている者が多く、使用目的も多様であった。また、その傾向は女子の方が強く SNS の利用も多かった。SNS 利用者の約半数は、SNS を通じて他者と個人的に関わった経験があり、不快な体験をした者もいた。しかし、小学生と中学1年生では、子どものオンラインゲーム使用の有無において親と子どもの回答割合に差がみられ、親は子どものインターネットの使用目的を正確に把握できていなかった。また、使用ルールに関しても親子間で認識の相違がみられ、その傾向は子どもの学年が上がるほど顕著であった。

また、インターネットのフィルタリング機能の利用率は、携帯電話に比べ低かった。

## KEY WORDS

インターネット (internet), 小中学生 (elementary and junior high school students), 思春期 (adolescent)  
親子間の認識 (recognition between child and their parent), SNS (Social Networking Service)

### はじめに

近年、情報通信技術の急速な進歩により、インターネットが著しく普及し、その使用範囲は拡大している。インターネット機器もパソコンが主体であった時代から、携帯性や操作性に優れたスマートフォンやタブレットPCなどが多く用いられるようになり、携帯型の音楽プレイヤーやゲーム機、テレビなど、ネットワークに接続可能な端末も多様化・高機能化している<sup>1)</sup>。ネットワーク環境も整備され、家でも学校でも手軽にインターネットが使える状況<sup>2)</sup>の中、子どもにとってもインターネットは既に身近なものとなっており、その利用率は年々増加している<sup>3)</sup>。

しかし、インターネット上には有害情報が掲載されたウェブサイトや出会い系サイトなど、子どもの健全な発達に悪影響を及ぼす情報も数多く存在し、それらを通じた犯罪や金銭トラブルなどの被害も報告されている<sup>4)</sup>。

また、安易なコミュニティサイトの利用が個人情報の漏えいや違法行為に繋がる危険もある。さらに、サイト上での誹謗中傷によって引き起こされるいじめ問題<sup>5)</sup>や長時間使用による生活習慣の乱れ<sup>6,8)</sup>など、問題は多岐にわたり非常に深刻である。

このような危険から子どもを守るためには、周囲の大人がインターネットの特徴を理解し、子どものインターネット使用状況を把握していることが重要である。さらに、使用におけるルールを取り決める、フィルタリングを利用するなどの対策は不可欠であり、保護者の担う役割は非常に大きいと考える。しかし、小学生を含めた子どものインターネット使用状況を保護者の認識と合わせて詳細に調査した研究は少ない。

そこで、本研究では、小中学生のインターネットの使用状況とそれに対する保護者の認識を調査し、子どものインターネット使用における課題を検討することとした。

金沢大学医薬保健研究域

\* 金沢大学附属病院看護部

## 【用語の定義】

・SNS：Social Networking Service（ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス）の略であり、本研究ではミクシー、ツイッター、Facebook、ブログ等、インターネット上のコミュニティサイト全てを含む。

## 研究方法

## 1. 調査対象

対象はA県にある1自治体の全小中学校（小学校5校、中学校1校）に通う小学4～6年生849名、中学1～3年生896名とその保護者である。

## 2. 調査期間

平成24年7月9日～13日

## 3. 調査方法

調査にあたっては、自治体の教育委員会の協力のもと、自治体内の全小中学校校長に調査を依頼し了承を得た。調査は無記名自記式質問紙にて学校でクラス毎に実施することとし、調査用紙の配布・回収は、予め作成した調査手順に基づいて担任教師が行った。保護者については子どもを介して配布、回収した。いずれも回答用紙は個別の封筒に入れ、完全に封をして回収した。調査への同意は、質問紙への回答をもって得るものとした。

## 4. 調査内容

子どもに対しては、学校以外でのインターネット使用に関する質問として、使用の有無、使用時間、使用機器、使用目的、使用における家庭でのルールの有無と内容、フィルタリング機能利用の有無、インターネット上での他人との個人的な関わりの有無と内容、インターネット使用に関わる不快体験、個人情報流出に対する意識、基本属性として学年、性別、家族形態を尋ねた。

保護者に対しては、子どものインターネット使用に関する質問として、子どものインターネット使用開始年齢、使用の際の不安、使用に関するルールの有無と内容、フィルタリング機能利用の有無を尋ねた。また、保護者自身

のインターネット使用に関する質問として、使用目的、使用時間を尋ねた。

## 5. 分析方法

インターネット使用状況における性別、学年別、校種別の割合比較には $\chi^2$ 検定、親と子どもの回答の割合比較には母比率の差の検定、使用開始年齢、母親の年齢、使用時間の比較にはt検定、一元配置分散分析、Bonferroni法による多重比較を行った。統計解析はSPSSVer.20.0を用い、有意水準は5%とした。

## 6. 倫理的配慮

調査実施にあたっては、自治体の教育委員会及び各中学校長、担任に本研究の意義、目的を書面及び口頭で説明し同意を得た。子どもに対しては書面及び担任を介して口頭で、研究の主旨、目的、および調査への参加は自由であり、不参加による不利益は被らないこと、調査は無記名で行い個人が特定されないよう個別の封筒に入れて回収し、結果の公表においても個人や学校が特定されないよう配慮すること、回答をもって調査への同意を得たものとするを説明した。保護者に対しても、同様の内容を書面にて説明した。なお、本研究は、金沢大学医学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：HS24-3-1）。

## 結果

## 1. 対象の背景(表1)

小学生733名（回収率91.2%、有効回答率94.7%）、中学生841名（回収率97.1%、有効回答率96.7%）から回答を得た。小学生、中学生共に各学年における男女の比率、家族形態、出生順に差はみられなかった。保護者については、小学生保護者697名（回収率82.1%、有効回答率100.0%）、中学生保護者766名（回収率86.8%、有効回答率98.5%）計1,463名から回答を得た。内訳は母親が1,322名（90.4%）、父親が127名（8.7%）、祖父母等14名（0.9%）であった。以下、保護者を親と示す。親の平均年齢は、 $41.1 \pm 4.9$ 歳で学年が上がるほど高かった。

表 1. 対象の背景

		小学生				p値	中学生				p値	校種比較 p値
		全体	4年	5年	6年		全体	1年	2年	3年		
子ども		733(100.0)	146(32.9)	261(35.6)	231(31.5)		841(55.9)	284(33.8)	288(34.2)	269(32.0)		
性別	男子	367(50.1)	116(48.1)	146(55.9)	105(45.5)	.052	445(52.9)	151(53.2)	154(53.5)	140(52.0)	.939	.260
	女子	366(49.9)	125(51.9)	115(44.1)	126(54.5)		396(47.1)	133(46.8)	134(46.5)	129(48.0)		
家族形態	核家族	496(67.7)	162(67.2)	178(68.2)	156(67.5)	.972	588(69.9)	203(71.5)	201(69.8)	184(68.4)	.732	.336
	拡大家族	237(32.3)	79(32.8)	83(31.8)	75(32.5)		253(30.1)	81(28.5)	87(30.2)	85(31.6)		
出生順	長子	354(48.3)	120(49.8)	126(48.3)	108(46.8)	.804	417(49.6)	155(54.6)	137(47.6)	125(46.5)	.114	.610
	長子以外	379(51.7)	121(50.2)	135(51.7)	123(53.2)		424(50.4)	129(45.4)	151(52.4)	144(53.5)		
親		697(100.0)	212(30.4)	247(35.4)	238(34.2)		766(100.0)	273(35.6)	253(33.0)	240(31.3)		
年齢 <sup>a</sup>		39.9 $\pm$ 4.9	39.3 $\pm$ 4.7	39.9 $\pm$ 4.9	40.8 $\pm$ 4.9	.002	42.1 $\pm$ 4.8	41.3 $\pm$ 4.8	42.3 $\pm$ 4.5	42.9 $\pm$ 4.9	<.001	<.001

人数（%）,  $\chi^2$ 検定, a: mean $\pm$ SD, 一元配置分散分析

## 2. インターネット使用状況

### 1) インターネット利用率と携帯電話所持率

学校以外でインターネットを利用している者は小学生70.8%、中学生84.4%で、小学生では学年が上がるにつれ高くなっていった。また、小学生では利用率に性差はみられなかったが、中学生では女子が男子より有意に高かった。開始年齢は小学生が平均8.9±1.8歳、中学生が11.1±1.7歳で、学年が低いほど開始年齢も低く、幼児期から使用している者もいた。

携帯電話の所持率は、小学生17.2%、中学生22.5%で、従来型のガラパゴス携帯は小学生15.5%、中学生13.6%、スマートフォンは小学生1.7%、中学生8.9%で、いずれも女子の方が男子より所持率は高かった。

### 2) 子どものインターネット使用状況(表2)

使用時間については、小学生では4年生の半数近くが「あまりしない」との回答であったが、6年生では「1時間」と回答した割合が有意に高く、「2時間以上」と合わせると、1日1時間以上使用する者が4割近くみられた。中学生では、全体の平均使用時間は75.1±63.7分で、2年生、3年生は1年生より、女子は男子より使用時間が有意に長かった。

使用機器は、小中学生ともに家族のパソコンが最も多かったが、中学生ではiPod touch、自分のパソコン、自分のスマートフォンを使う者も多く、性別にみると小中学生ともに男子はゲーム機、女子は家族のスマートフォンを使用している者が多かった。ひとりで複数の機器を使用している者が小学生では33.4%、中学生の48.2%に見られた。また、スマートフォンのように持ち運び可能な機器を使用している者、自分専用の機器を所持している者はいずれも中学生に多かった。

使用目的は小中学生ともに「動画を見る」、「調べ物をする」の割合が高かったが、小学生では「ゲームをする」、中学生では「動画を見る」、「調べ物をする」、「音楽を聴く」、「SNSをする」、「メールをする」、「買い物をする」の回答割合が有意に高かった。また、「調べ物をする」、「音楽を聴く」、「メールをする」、「勉強する」、「SNSをする」のいずれも女子の方が男子より回答割合が有意に高かった。使用目的が多岐にわたる(ひとりで6種類以上の目的をあげている)者は小学生では6.9%であるのに対し、中学生では26.5%にみられ、中学生が有意に高かった。また、その割合は小中学生ともに女子が有意に高かった。一方、使用目的が限定されている者は小学生に多かった。

表2. 子どものインターネット使用状況

	小学生				中学生				校種比較 p値
	全体 n=519	男子 n=255	女子 n=264	p値	全体 n=710	男子 n=362	女子 n=348	p値	
使用時間 <sup>a</sup>					75.1±63.7	67.6±58.5	82.8±67.9	.002	
あまりしない	183(35.7)	91(36.3)	92(35.1)	.064	74(10.7)	44(12.4)	30(8.9)	.015	<.001
30分くらい	194(37.8)	106(42.2)	88(33.6)		188(27.2)	110(31.1)	78(23.1)		
1時間くらい	102(19.9)	41(16.3)	61(23.3)		254(36.7)	122(34.5)	132(39.1)		
2時間以上	34( 6.6)	13( 5.2)	21( 8.0)		176(25.4)	78(22.0)	98(29.0)		
使用機器 <sup>b</sup>									
家族のパソコン	410(79.0)	198(77.6)	212(80.3)	.263	503(70.8)	236(65.2)	267(76.7)	<.001	.001
ゲーム機	121(23.3)	77(30.2)	44(16.7)	<.001	189(26.6)	128(35.4)	61(17.5)	<.001	.188
家族のスマートフォン	77(14.8)	26(10.2)	51(19.3)	.002	92(13.0)	29( 8.0)	63(18.1)	<.001	.345
ipodtouch	33(6.4)	15( 5.9)	18( 6.8)	.399	167(23.5)	98(27.1)	69( 19.8)	.023	<.001
自宅以外のパソコン	33(6.4)	11( 4.3)	22( 8.3)	.044	42( 5.9)	21( 5.8)	21( 6.0)	.895	.749
自分のパソコン	26(5.0)	11( 4.3)	15( 5.7)	.305	109(15.4)	66(18.2)	43(12.4)	.030	<.001
自分のスマートフォン	12(2.3)	5( 2.0)	7( 2.7)	.410	73(10.3)	24( 6.6)	49(14.1)	.001	<.001
一人で複数の機器を使用	169(33.4)	84(34.3)	853(2.6)	.682	342(48.2)	173(47.8)	169(48.7)	.808	<.001
使用目的 <sup>c</sup>									
動画	330(63.6)	169(66.3)	161(61.0)	.123	550(77.5)	284(78.5)	266(76.4)	.520	<.001
調べ物	319(61.5)	142(55.7)	177(67.0)	.005	518(73.0)	261(72.1)	257(73.9)	.599	<.001
ゲーム	309(59.5)	143(56.1)	166(62.9)	.068	339(47.7)	191(52.8)	148(42.5)	.006	<.001
音楽	189(36.4)	64(25.1)	125(47.3)	<.001	486(68.5)	221(61.0)	265(76.1)	<.001	<.001
勉強	127(24.5)	54(21.2)	73(27.7)	.053	148(20.8)	62(17.1)	86(24.7)	.013	.132
漫画	50(9.6)	17( 6.7)	33(12.5)	.017	78(11.0)	37(10.2)	41(11.8)	.506	.443
SNS	47(9.1)	9( 3.5)	38(14.4)	<.001	250(35.2)	79(21.8)	171(49.1)	<.001	<.001
メール	27(5.2)	8( 3.1)	19( 7.2)	.029	316(44.5)	136(37.6)	180(51.7)	<.001	<.001
買い物	25(4.8)	12( 4.7)	13( 4.9)	.536	123(17.3)	56( 7.9)	69( 9.4)	.183	<.001
使用目的の多様性 <sup>d</sup>									
限定型	258(49.7)	145(56.9)	113(42.8)	<.001	169(23.8)	108(29.8)	61(17.5)	<.001	<.001
中間型	225(43.4)	102(40.0)	123(46.6)		353(49.7)	183(50.6)	170(48.9)		
多用途型	36( 6.9)	8( 3.1)	28(10.6)		188(26.5)	71(10.0)	117(33.6)		

a: 小学生 n=513, 中学生 n=692, 使用時間の平均±標準偏差は中学生のみ, t検定. b, c, d: 小学生 n=519, 中学生 n=710, b, c: 複数回答で使用有りとな回答した人数(%), d: 使用目的の多様性は個人が回答している目的の数により分類, 限定型: 使用目的が1種類のみ, 中間型: 2~5種類, 多用途型: 6種類以上. a, b, c, d の性別比較, 校種比較はχ<sup>2</sup>検

### 3) 親のインターネット使用状況

一方、親自身のインターネット使用状況については、使用率は小学生の親92.7%、中学生の親90.3%で、9割以上であった。使用目的は「調べ物をする」87.2%、「メールをする」78.0%、「買い物をする」47.3%の順に高く、親と子どもでは使用目的が異なっていた(図1)。

### 4) SNSの利用状況

SNS利用率は、小学生9.1%、中学生35.2%で、いずれも女子の割合が高かった。SNSに掲載する内容は、女子では「1日の出来事」、「誕生日」、「学年」、「顔写真」、男子では「メールアドレス」が多く、男女で掲載内容は異なっていた。SNS使用者のうち、SNSを通じて実際に他人と個別に関わりを持った経験のある子どもが55.1%おり、その7割は女子であった。関わりの内容は「“友だち”(サイト上で連絡を取り合えるユーザーを示す用語で本来の友達とは異なる)になる」が最も多く、「メールをする」、「電話をする」、「会う」などの私的な関わりを持つ者もいた。また、女子ではSNS使用の有無により、個人情報流出に対する意識に差がみられ、SNSを使用している者はしていない者に比べ個人情報流出に不安を感じている者の割合が低かった( $p<.01$ )。

### 5) 不快な体験

インターネット使用による不快体験のある者は小学生0.8%、中学生6.6%で、女子に有意に多く( $p<.001$ )、その内容は「悪口を書かれた」、「他人からしつこくメールが来た」、「個人情報を流された」等であった。

## 3. 子どものインターネット使用における親の把握状況

子どものインターネット使用について、親と子どもの回答を比較すると、「使用している」との回答は親が71.2%、子どもが78.1%で、親は子どものインターネットの使用の有無を概ね把握していた。しかし、子どものオンラインゲーム使用の有無については、小学生と中学1年生において親と子どもの回答割合に差がみられ、親は子どもの具体的な使用内容までは把握できていないこ

とが示唆された(図2)。

## 4. 子どものインターネット使用に対する親の不安と対処行動

### 1) 親の不安

親の不安で多かったのは「有害サイトへアクセス」62.4%、「個人情報を書き込むこと」46.1%であった。「健康を害すること」は小学生の親に有意に多く( $p<.05$ )、中学生の親では「学習時間の減少」の回答が有意に多かった( $p<.001$ )。

### 2) フィルタリング機能利用の有無

携帯電話のフィルタリング機能の利用率は、小学生62.0%、中学生67.6%であった。一方、インターネットのフィルタリング機能の利用率は、小学生24.2%、中学生34.2%と低かった。また、小中学生ともに親の2割はインターネットにフィルタリングがされているかわからないと回答していた。

### 3) 使用時のルールの有無と内容

使用時のルールについて、小学生では、「使用時間を決めている」が43.4%、「親がいるところで使う」が42.8%、「使用時間帯を決めている」が20.4%であった。一方、中学生では、「ルールを決めていない」が60.3%と最も高かった。ルールについて親と子どもの認識を比較すると、「ルールを決めていない」と回答した割合は、子どもでは学年が上がるにつれて高くなっており、学年が上がるほど親子の認識の相違が顕著になっていた(図3)。また、「親がいるところで使う」は、小学5年生以上の全ての学年で子どもの回答割合が親より有意に低く、親子の認識に大きな不一致がみられた(図4)。

## IV. 考察

総務省によれば、平成25年度末における携帯電話普及率は94.8%、世帯当たりのパソコン所有率は81.7%で、ここ数年、情報通信機器の普及は急速に進んでいる<sup>9)</sup>。中でもスマートフォンの普及率は飛躍的で、いまや高校生

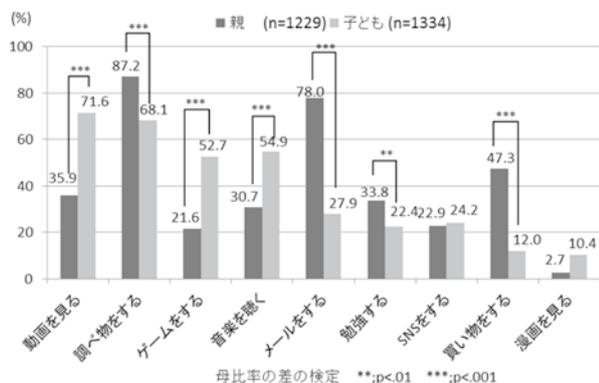


図1. インターネット使用目的の親子比較 (複数回答)

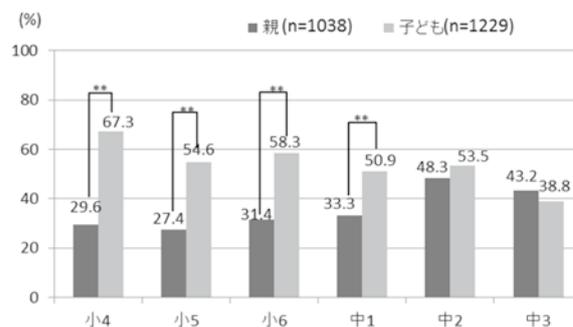


図2. 子どものオンラインゲーム使用に対する親子間の認識の比較

親: 自分の子どもはオンラインゲームを使用している  
 子: ぼく/私はオンラインゲームを使用している との質問に「はい」と回答した割合  
 母比率の差の検定 \*\*: $p<.01$

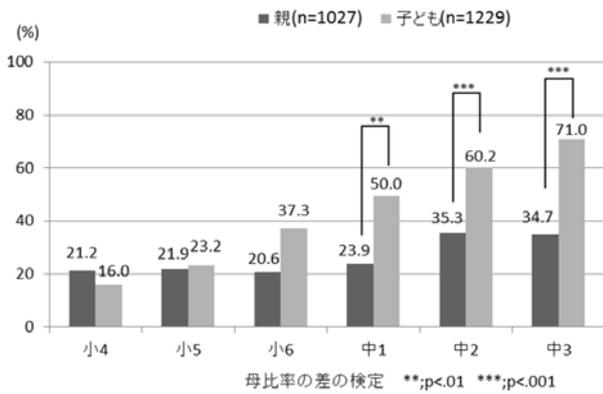


図3. 「ルールを決めていない」と回答した割合の親子間比較

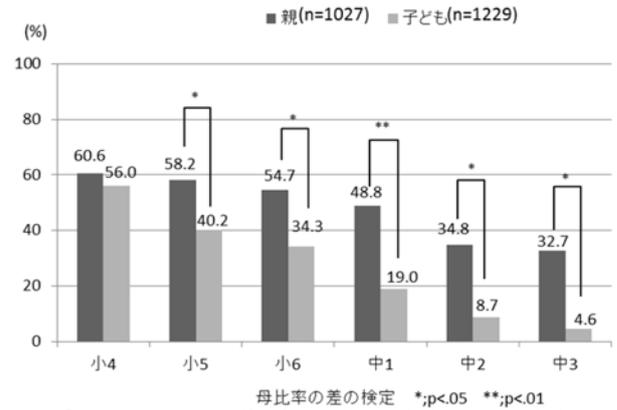


図4. 「親がいるところで使う」と回答した割合の親子間比較

のみならず中学生以下の子どもにも、その利用は広がってきている。本調査を実施した平成24年は、無料の通話・メールアプリ“LINE”の初版が登場した翌年にあたり、スマートフォンが急速に普及し始めた時期である<sup>3)</sup>。本調査時点での子どものスマートフォン保持率は小学生1.7%、中学生8.9%で、同年度に行なわれた総務省の調査結果<sup>10)</sup>と比較するとやや低いが、一方で家族のスマートフォンの利用率は高く、その背景には、親や年上のきょうだいなど家庭の中でそれを利用する者が増えつつある状況が想定される。今回、多くの子どもが複数の機器を使用していたという結果は、子どもが大きく変化する情報通信環境に順応し身近にある機器を巧みに使いこなしている状況を覗かせるが、一方で親は子どもの状況を管理しづらくなっている状況にあることを示唆している。さらに中学生になると、自分専用の機器や、持ち運び可能な機器の利用が多くなるため、親の目の届かないところでの使用が多くなり、親は子どもの状況をいっそう把握できなくなる状況が生じていると考えられる。

また、インターネット使用目的も多様化しており、特に、女子では、SNSの利用率が高く、このことは、他者サイトへのアクセスや投稿は女子に多い<sup>11)</sup>という、高校生を対象とした調査の結果とも類似している。女子は他者との繋がりを求める傾向が強く、コミュニティサイトへの関心も高いことが考えられるが、一方でSNSを利用している女子は個人情報流出を心配する傾向が低く、個人を特定できる内容をネット上に掲載したり、そこで知り合った人と私的な関わりを持つなど危険な行動もみられた。したがって、トラブルに巻き込まれる可能性はより高いことが考えられる。最近では子どもが使いそうなサイトに良い人を装って忍びこんでいる犯罪者が増えており、警察庁によるとこのようなコミュニティサイトで犯罪被害にあった子どもの被害件数は、出会い系等の危険サイトにおける被害件数の5倍にも上ることが報告されている<sup>12)</sup>。さらに、このようなコミュニティサイトの利用の延長上には、友人関係を維持するためにメールやチャット

の返信に翻弄される<sup>13)</sup>などのネット依存や、ネット上に悪口や個人情報を書き込むといったネットいじめ<sup>14)</sup>などの問題も発生しており、中にはそれが原因で子どもが死に至るような状況も国内外で少なからず報告<sup>15)</sup>されている。

そのような状況の中、親は子どものインターネットの使用に不安を抱きつつも、使用状況を正確には把握できていないという実態が確認された。その理由として、上述のように、子どもの利用に親が追い付けないことや、持ち運び可能な機器が増え親の目が届きにくいこと、さらに、使用目的が親と子では異なるため親が子どもの使用内容を想像しにくいことなどが考えられる。また、インターネット使用時のルールに対する親子間の認識の相違は学年が上がるにつれ大きくなっていったが、このような相違は思春期を境に顕著になっており、反抗心や自立心を抱くといった思春期特有の課題により、親子の話し合いが不十分になっていることが考えられる。さらに、インターネットを早期から使用している子どももおり、危険性に対する意識も低い。したがって、子どもに対する情報モラルの教育は早い段階から行っていく必要がある。親は子どもが安全にインターネットを使用できるよう、子どもの使用状況を知り、危険性を理解したうえで、情報機器や家庭環境に合ったルールを親子間で話し合っ決めていくことが重要である。また、使用環境の変化や子どもの成長に応じて、親子間の認識に相違が生じないように、定期的に話し合うことも必要である。さらに、思春期の子どもに対しては、報酬や罰などによる強制的な管理よりも、子どもの自尊心を尊重し自主的な行動を評価することが行動変容に有効<sup>16)</sup>との報告もあることから、インターネットの使用に関する取り決めも、発達段階を考慮した対応により、親子間の良好なコミュニケーションの機会となり得ると考える。

今後、情報通信技術はますます進化し、それに伴ってまた新たな問題が生じることが考えられる。幼少期からインターネットがあることが当たり前である子ども世代

とは異なり、親は苦手意識を持つ者も多いが、親は子どもが安全にインターネットを使用できるよう、子どもの使用状況に関心を持ち、親子でインターネットとの付き合い方を真剣に考える機会を多く持つことが重要であると考えられる。

#### 【本研究の限界と課題】

本研究の対象は1自治体の小中学生とその親であるため、結果の一般化には限界がある。また、今回の研究では親と子どものデータの照合はできないため、親の考え方や行動が子どもに及ぼす影響については言及できず今後の課題である。

#### V. まとめ

本研究は、小中学生とその親を対象に子どものインターネット使用状況とそれに対する親の把握状況、親子間での使用ルールに対する認識の違いを調査し、以下の

ことが明らかになった。

1. インターネット使用率は小学生70.8%、中学生84.4%で、学年が上がるほど使用時間は長く、複数の機器を用いている者が多く、使用目的も多様であった。
2. SNSの利用は女子に多く、利用者の約半数はSNSを通じて他者と個人的に関わった経験があった。
3. インターネットのフィルタリング機能の利用率は、携帯電話に比べ低かった。
4. 親は子どものインターネットの使用目的を正確に把握できていなかった。また、使用ルールに関しても親子間で認識の相違がみられ、その傾向は子どもの学年が上がるほど顕著であった。

#### 【謝辞】

調査にご協力いただいた小中学生および保護者の皆様、自治体の教育委員会、小中学校の先生方に心より感謝申し上げます。

#### 【引用文献】

- 1) 総務省: 平成23年版情報通信白書. [オンライン, <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/h24.html>], 総務省, 3. 4, 2014.
- 2) 内閣府: 平成25年度青少年のインターネット利用環境実態調査. [オンライン, <http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h25/net-jittai/pdf-index.html>], 3. 6, 2014.
- 3) 総務省: 平成26年度情報通信白書. [オンライン, <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/pdf/index.html>], 3. 20, 2014.
- 4) 日本PTA全国協議会: 子どもとメディアに関する意識調査 調査結果報告書. 128-202, 2012.
- 5) 寺戸武志, 永浦拓, 富永良喜: 中学生における情報機器の利用状況およびネットいじめ経験の実態調査. 発達心理臨床研究 16: 89-106, 2010.
- 6) Miyazaki K, Kajiwara K: Child-Evaluated Family Function and Lifestyle. *Journal of nursing · health science research* 14 (1): 30-37, 2013.
- 7) 藤田委由, 三浦美樹子, 天野宏紀, 他: 小児期における情報機器利用と睡眠. *島根医学* 33 (1): 8-12, 2013.
- 8) Li S, Zhu S, Jin X, et al.: Risk factors associated with short sleep duration among Chinese school-aged children. *Sleep Medicine* 11: 907-916, 2010.
- 9) 総務省: 平成25年度 通信利用動向調査. [オンライン [http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/140627\\_1.pdf](http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/140627_1.pdf)], 3. 6, 2014.
- 10) 内閣府: 平成24年度青少年のインターネット利用環境実態調査. [オンライン, <http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h24/net-jittai/pdf-index.html>], 4. 15, 2014.
- 11) 渡辺多恵子, 磯貝恵美, 田中笑子, 富崎悦子他: 高校生の安全なインターネット利用に関連する要因—インターネット利用の実態と共感性—. *小児保健研*, 71 (1): 38-45, 2012.
- 12) 警察庁: 平成24年中の出会い系サイト等に起因する事犯の現状と対策について. 警察庁広報資料. 平成25年2月28日. [オンライン <http://www.npa.go.jp/cyber/statics/h24/pdf02-2.pdf>], 3. 24, 2014.
- 13) 山脇彩, 小倉正義, 濱田祥子, 他: 女子中学生におけるインターネット利用の現状とインターネット依存とメンタルヘルス上の問題との関連. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要* 59: 53-60, 2012.
- 14) 寺戸武志: 中学生におけるネットいじめについて. *思春期学*, 32 (1): 26-32, 2014.
- 15) Bailin A, Milanaik R, Adesman A: Health implications of new age technologies for adolescents: a review of the research. *Current Opinion in Pediatrics* 26 (5): 605-619, 2014.
- 16) Uncu Y, Vural P, Buyukuysal C, et al.; How parental attitudes affect the risky computer and internet usage patterns of adolescents: A population-based study in the Bursa district of Turkey. *Central European Journal of Publish Health* 22 (4): 266-271, 2014.

**Survey of Internet use among elementary and junior high school students  
— Differences in recognition between the child and their parents —**

Akiko Tsuda, Rumiko Kimura, Maki Mizuno, Akiko Kita\*

Abstract

This study was performed to investigate the use of the Internet among children, and the difference in recognition between the child and their parents. A total of 849 elementary school students and 896 junior high school students and their parents were included in the study, which was implemented via a questionnaire. The rates of Internet use were 70.8% among elementary school students and 84.4% among junior high students, and increased with age. The most common apparatus used to connect to the Internet was the PC, but there were subjects that used an iPod touch or smartphone among junior high school students. Furthermore, many students used multiple apparatuses for various. There was a high rate of Social Networking Service (SNS) text messaging use among girls. About half of the SNS users communicated with people they did not know by sight through this service, and some students reported having had unpleasant experiences. However, the parents did not fully understand the purpose of Internet use by their children. Many parents and children had no rules regarding Internet use, and it was high in the tendency with age. Furthermore, the rate of Internet filtering use was lower than that on cell phones.